

古代インドの雇傭労働者

山崎 元 一

- 一、はじめに
- 二、karmakara と bhṛta
- 三、仏典の雇傭労働者
 - (1) 契約
 - (2) 村落における雇傭労働者
 - (3) 都市における雇傭労働者
- 四、『アルタシャーストラ』の雇傭労働者
 - (1) 雇傭労働者法規
 - (契約・契約の不履行・被傭人組合)
- 五、ヒンドゥー法典の雇傭労働者
 - (1) 契約
 - (2) 契約の不履行
 - (3) 責任と過失
 - (4) 労働者保護の法規
- 六、総括

一、はじめに

従来の古代インド社会研究は、種姓制度一般、あるいはバラモン、クシャトリヤ、都市の富裕者などを対象としたものが多く、実際に生産を担った下層の民衆に関する研究はかなり遅れた段階にある。^① 下層階級のうちでも、奴隷については近年発表された諸研究によつて次第に解明されてきたが、^② 奴隷と並んで古代インド社会の諸方面で無

古代インドの雇傭労働者 山崎

第五十一卷 四九五

視できぬ役割を演じた雇傭労働者を考察の対象とした研究は、これまでほとんど発表されることがなかった。しかし、古代インドにおける村落共同体や都市の経済活動を明らかにする上で、雇傭労働者の問題はきわめて重要である。私は別稿「古代インド奴隸制度の性格」⁽³⁾において、奴隸制度の存在形態を検討したが、本稿では前稿と同じ資料に拠りつつ、雇傭労働者が古代インドの社会でどのような位置を占めていたかという問題を検討してみたい。

本稿で使用した資料は、本生経類を中心とする小乗系の諸仏典、『アルタシャーストラ』⁽⁴⁾、ヒンドゥー法典⁽⁵⁾の三種である。これら三資料を選んだ第一の理由は、三資料がそれぞれ異つた立場から書かれた代表的な文献だからである。異なつた立場に立つ三資料の各々に述べられる雇傭労働者の記事をまず個別的に検討し、続いて相互の比較を試みることによつて、雇傭労働者の姿を一層正確に把握できるものと思う。三資料を選んだ第二の理由は、何れも古代インド研究上の基本的な資料として、すでに原典研究が相当に深く行われているからである。私としては、この研究を皮切りに他の資料の検討に進むつもりであるが、今後の研究への足掛りを提供してくれるものとして、これら三資料は最も有効であると考えている。

第一の資料、すなわち本生経類を中心とする小乗系の諸仏典のなかには、西暦紀元以後の数世紀間に現在形として成立したものも多い。しかし、その原形ともいふべき經典は、遅くとも西暦紀元前後には出そろつていたと考えてよからう。仏典中で雇傭労働者について述べる記事の大部分は、架空の出来事を扱つたものであるが、こうした記事には、当時の雇傭労働者の現実の姿がかなり明確に反映されているものと思われる。

第二の資料『アルタシャーストラ』は、マウリヤ朝の宰相カウティリヤが著わしたと伝えられる政治論書である。

一部の史家はこの作品をマウリヤ朝時代に成立したものと考え、ここからマウリヤ朝の社会や政治を論じているが、本稿ではこうした立場はとらない。本書はインドの政治論者の間で論じられてきた諸見解を集大成し、彼らの学派の祖とされたカウティリヤの名を冠して世に伝えられたものである。本書の核心部分の成立がマウリヤ朝時代に遡ることは十分に考えられるが、現在形にまとめられたのは西暦紀元以後のことと思われる。

第三の資料ヒンドゥー法典（ダルマシャーストラ）類は、ヴェーダ研究の諸学派によって伝承されたものであるため、バラモンの立場から定められた法規という色彩が強い。従つて社会の現実を具体的に伝える資料とは必ずしも言えないが、法典中の諸規定に当時の社会慣習が盛込まれていることは当然考えられ、また古代インドの社会の諸方面におけるバラモンの指導的立場を考慮すれば、諸規定が当時の社会にかなりの作用を及ぼしたことは容易に想像できる。諸法典の成立年代については、P・V・カネーの説に従い、ダルマシャーストラ中最古の『マヌ法典』は前二〇〇—後一〇〇年、最も新しい『カーティヤーヤナ法典』は四〇〇—六〇〇年の成立と考えておきたい。⁽⁷⁾以上の三資料の成立地については、成立年代の場合と同様に明らかではない。ガンジス流域を中心とする北インド、及びこの地の文化的影響を受けた周辺諸地域で成立したと言い得ようか。

さて、雇傭労働者とは労働に対する代償として金銭あるいは現物の報酬を受ける者を指す。兵士や官吏、司祭者や芸人の類も、傭われて働くという意味では雇傭労働者であるが、本稿では彼らを考察の対象からはずした。しかし、『アルタシャーストラ』やヒンドゥー法典では、雇傭労働者の総称である「karmakara」「bhritaka」の範疇に兵士や芸人などを含めることがあり、一般の労働者と彼らを識別することが不可能な場合も多い。こうした不明確

さは残るが、本稿では「他者に傭われて生産労働や日常の諸雑務に従事する者」を指して雇傭労働者と呼ぶことにしたい。

雇傭労働者の中には、世襲的に主人の隷属下に置かれ家内の雑役に従事する召使的存在、他人の用具を用いて生産や諸雑務に従事する日傭労働者や長期契約労働者、工具や農具など多少の生産用具を持ち雇主と契約関係を結ぶ労働者、雇傭労働を専業とする者あるいは副業とする者など、きわめて雑多な形態が含まれており、従つて雇主との間の雇傭関係も多種多様なものとなつてゐる。しかし、古代インドの文献の多くは、雇傭労働者間のこうした区別をはつきりさせていない。本稿においては、ある程度の不明確さは覚悟の上、これら雑多の存在を一様に雇傭労働者と呼んでいる。

雇傭労働者は雇主との間に何らかの形で契約を結び、その契約に行動を制限されつつ労働に従事した。『ナーラダ法典』の言葉を借りれば、彼らは「奴隷と同じく従属性 (asvatantatva) を本質とする者」(V) ということになる。しかし、奴隷が全人格を他に与えた「もの」としての存在であるのに対し、雇傭労働者はいわば自由人に属する。この区別は仏典、『アルタシャーストラ』、ヒンドゥー法典の何れにおいても一応為されている。しかし、別稿「古代インド奴隷制度の性格」の中で論ずるように、『アルタシャーストラ』やヒンドゥー法典では、主人の絶対的な支配下に置かれた奴隷(終身奴隷)以外に、負債返済まで一時的に奴隷状態に置かれる者(一時的奴隷)を奴隷の範疇に加えることがある。こうした一時的奴隷のなかには、むしろ半自由な雇傭労働者と考えた方が適当な者も存在するのであり、奴隷と雇傭労働者の境界は必ずしも明確ではない。

古代インド社会においては、生得の身分であるヴァルナ（種姓）が個人の労働の種類を決定する重大な要因であったため、雇傭労働者にとつて職業選択の範囲はかなり制限されていた。例えば『アルタシャーストラ』においても、ヒンドゥー法典と同様に四ヴァルナの義務が明記されている。それによれば、バラモンの義務はヴェーダの学習と教授、自己のための行祭と他人のための行祭、布施と受施。クシャトリヤの義務はヴェーダの学習、自己のための行祭、布施、武器による生活及び生類の保護。ヴァイシヤの義務はヴェーダの学習、自己のための行祭、布施、農耕、牧畜及び商業。シュードラの義務は再生族への奉仕、実業（農耕・牧畜・商業など）、手工業、遊芸である（tagh⁽⁸⁾）。このように、ヴァルナとの関係からみれば雇傭労働者のはとんどがヴァイシヤとシュードラ、特に後者ということになる。雇傭労働とヴァルナが密接に関係することは言うまでもない。しかし、前者が経済上の概念であるのに対し、後者は儀礼的・宗教的な観念のもとに定められた生得の身分なのである。古代インドにおいて、「職業」と「生まれ」との結びつきは決して絶対的なものではなかった。高位ヴァルナの者が生活の必要に迫られて本来低位ヴァルナのものでとされる職業に従事することも、あるいは低位ヴァルナの者が高位ヴァルナに属する職業に従事することも、しばしば見られたのである。⁽⁹⁾ 本稿においては、雇傭労働とヴァルナとの関係をひとまず切離し、焦点を雇主と雇傭労働者との関係に置いて考察することにした。

11' karmakara と bhṛtaka

雇傭労働者と言つても、その構成がきわめて雑多であることはすでに述べた通りである。このような雑多な雇傭

労働者を全体として呼ぶ語に *karmakara* と *bhṛtaka* がある。このうち、*karmakara* は「働く者」一般を意味し、⁽¹⁰⁾「傭われた者」を意味する *bhṛtaka* ⁽¹¹⁾より広義に用いられることがある。しかし、両語の意味には共通する部分が大きく、両語はしばしば同義に用いられる。

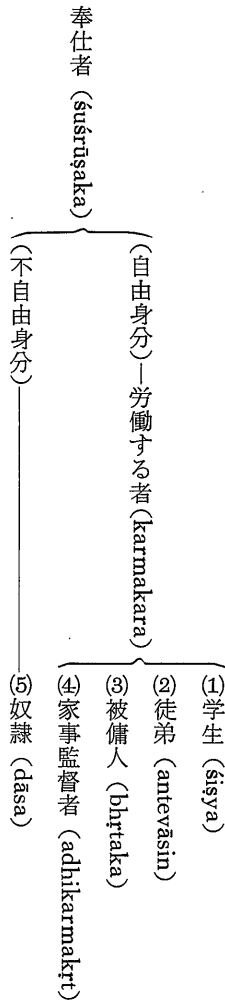
仏典の中で、*karmakara* (Pali: *kammakara*) は *dāsa* (奴隸) と結合した形で現われることが多い (*dāsakammakara*, *dāsa vā kammakara vā*)⁽¹²⁾。パーリ『律藏』によれば、*dāsa* とは家生奴、買得奴、捕虜奴などの奴隸を指し、*kammakara* は雇傭労働者 (*bhataka*, Skt. *bhṛtaka*) と隷属的労働者 (*ahataka*) を指すと説明されている。また、『四分律』には、奴と客作人の説明として「奴とは或は買得或は家の所生、客作とは財雇して為さしむるなり」とあるが、⁽¹³⁾この客作人は *karmakara* の訳語であろう。何れの場合にも *karmakara* は、不自由身分である奴隸に対する雇傭労働者の総称として用いられていることがわかる。しかし、仏典中で「*dāsakammakara*」と連記された場合、*kammakara* はしばしば耕作をはじめとする諸種の肉体労働を奴隸と一緒にに行っており、仕事の内容や生活環境に関して両者の間に特に差別は設けられていない。⁽¹⁴⁾こうした仏典中の記事から、奴隸と変らない隷属的地位に置かれた *kammakara* も多かったことが想像できる。

なおパーリ仏典には、*dāsa*, *kammakara* と並べて *manussa*, *porisa*, *purisa*, *peṇsa* などの語が記されることがある。⁽¹⁵⁾この場合 *manussa* などの語は、何れも使用主の下で種々の労役に服する召使いなどを指していると考えられる。しかし、彼らと *dāsa* や *kammakara* との間に必ずしも明確な区別は存在していない。労働者を自由身分と不自由身分に分類した場合、*manussa* などは個々の例によつて何れに属することもあり得ると思われる。

『アルタシャーストラ』においても、karmakara と bhṛtaka の両語は、労働の報酬として給与 (vetana) を受ける自由人の雇傭労働者の意味に用いられている。同書第三卷の第十三章後半から第十四章前半にかけて、karmakara と bhṛtaka に関する諸法規がまとめられているが (III.1325—III.1477)、karmakara と bhṛtaka の両語の間に特に区別は設けられていない。しかし、『アルタシャーストラ』中に一個所、bhṛtaka と karmakara が異つた意味に用いられているらしい記載がある。すなわち、同書の第五卷第二節において、bhṛtaka に扮する密偵に対して、国家の反逆者を罪に陥れるため、「(反逆者である主人から) もらつた賃金の中に偽造貨幣を投じて、これを偽り人々に見せしめる」ことが命ぜられ (V.266)、他方 karmakara に扮する密偵には、「(反逆者の) 家で仕事を為しつつ、ひそかに偽造貨幣の道具を運び込む」ことが命ぜられているのである (V.267)。『アルタシャーストラ』の訳者 R・P・カングレは、ここで bhṛtaka を「servant」、karmakara を「workman」と訳し、中野義照氏もまたそれぞれ「使用人」、「労働者」と訳している。bhṛtaka は賃金を得るため傭われたことに重点を置いた語であり、karmakara は労働することに重点を置いた語である。『アルタシャーストラ』の右の記事も、このような意味の相違を念頭に置いて書かれたものであろうが、両者の社会的地位に特別な差があつたとは思われない。彼らが奴隷ではなく自由人の雇傭労働者であつたことは確かであろう。

次にヒンドゥー法典中の karmakara と bhṛtaka の両語を検討してみたい。『ナラダ法典』には、奉仕者 (śūdrasaka) が五種に分類されている (V.2.3)。そのうちの第一は師に奉仕しつつヴェーダを学習する学生 (śiṣya)、第二は技術習得期間中親方の家で労働奉仕を行う徒弟 (antevāsīn)、第三は被傭人 (bhṛtaka)、第四は家財・家事

監督者 (adhikarmakṛt)⁽¹⁶⁾、第五は奴隸 (dāsa) である。これらのうち、本稿で考察の対象とするのは第三と第四の項目に属する者たちである。⁽¹⁷⁾



なお『ナーラダ法典』は、第一から第四までを清浄な仕事を為す「karmakara」、第五を不浄な仕事を為す「dāsa」として分類し、更に続けて奴隸の為すべき不浄な仕事とは、戸口・便所・街路・屑捨場の清掃、主人の秘部の洗浄、残食や大小便の片付け、主人の身体の按摩などであると説明している (V₂₇)。この法規を文字通り解釈すれば、雇傭労働者は右に挙げた不浄な仕事をしなくてもよいことになる。しかし、これは上位ヴァルナの者にのみ適用される法規であり、シュードラに奴隸的奉仕 (dāśya) を命ずる『イヌ法典』の法規 (VIII₄₁₃₋₄₁₄) から推して、シュードラの雇傭労働者に対しては、必要とあらば不浄な仕事を命じ得たものと考えられる。⁽¹⁸⁾

また『ナーラダ法典』は、karmakara の一種として挙げた bhṛtaka を高級 (戦士 ayudhiya)⁽¹⁹⁾、中級 (耕作者 kṛśivāla)⁽²⁰⁾、低級 (運搬人 bharavāla) の三種に分類している (V₂₂₋₂₃)。それぞれクシャトリア、ヴァイシヤ、シュードラ本来の職務を代表させたものと考えてよからう。しかし、給与の額は必ずしもこの順序ではなかった。同

法典は「彼ら（奉仕者 *sūtrāsaka*）の個々の地位の区別は生れ（*jati*）により、収入は仕事（*karma*）によつて（定まる⁽²⁰⁾）」（*V₁*）、「彼ら（被傭人 *bhṛaka*）の労働に対する報酬は、彼らの技術（*sakti*）と献身（*bhakti*）の程度に準じて定められる」（*V₂*）と説明している。

三、仏典の雇傭労働者

本節では、仏典の中に見出される雇傭労働者について、(1)契約、(2)村落における雇傭労働者、(3)都市における雇傭労働者、という三項目を立てて検討したい。

(1) 契約

雇傭労働者は、雇主と何らかの形で契約を結んだ。仏典中には契約の過程を伝える物語が散見される。一例として次の物語を紹介しておこう。

長者の子が幼時に父母を失い、やがて貧しくなり、他人の許で働き生計を立てていた。彼はある日三十両金を仏陀と衆僧に供えようと決心し、客作する場所を求めて歩いた。彼は市辺に住む大富豪の許にやつて来た。富豪「お前にできる仕事は何か。」長者子「どんな仕事でもできます。」富豪「三年間働いたとして、どれだけの報酬がほしいか。」長者子「三十両金がほしい。」富豪の尋ねたいちいちの仕事を長者の子は立派にやつてのけると答えたので、富豪は彼を雇つて働かせることに決めた。⁽²²⁾

右の物語は、仕事の内容、期間、給与額などが前もつて定められたことを伝えている。しかし、ここでは長者の子は職種について選択をしておらず、また富豪が長者の子の「生まれ」に配慮したかどうかも明らかではない。

契約の例としては、この他にも雇主との間に完成払いの契約が結ばれた例⁽²³⁾、雇主がまず給与その他の条件を提示し就労の意志を確かめた例⁽²⁴⁾などが見られる。報酬は金銭で支払われるか、衣類や食料などの現物で支給された⁽²⁵⁾。支払いの時期は、先払い、分割払い、後払いなど一定していなかったが、短期の場合は契約期間の終了後に、また契約物の完成後に支払われることが多かったようである⁽²⁶⁾。契約期間中に雇傭労働者の無能が判明した場合には、給与の支払いが拒否されることもあり⁽²⁷⁾、雇傭労働者の不注意から生じた損失は彼ら自身で弁償せねばならなかった⁽²⁸⁾。すでに述べたように、仏典中にはしばしば、日々の食事と僅かな報酬を与えられ世襲的に主家に仕える召使いが登場する。彼らが右に紹介したような手続きを踏んで契約を結ぶことはむしろ稀であり、ほとんどの者が暗黙の了解のもとに労働に従事していたものと思われる。

『シンガローヴァアードラスッタタ(Singalovada-suttanta)』には、奴隷と雇傭労働者を正しく取扱う方法として次の五つの行為が挙げられている。

- (1) 能力に応じて仕事を課すること、(2) 食物と給料を与えること、(3) 病時に看病すること、(4) 珍味の食事を分け与えること、(5) 適当な時に休息させること。

更に同経典には、奴隷と雇傭労働者は次のような態度で主人に仕えるよう奨励されている。

- (1) 主人よりも朝早く起きること、(2) 主人よりも後に就寝すること、(3) 与えられた物のみを受けること、(4) 仕事

を善く為すこと、(5)主人の名誉と称讃を吹聴すること。

これらの記事は、多くの雇傭労働者が奴隷・主人関係とほとんど変わらない従属的關係のもとに置かれていたことを物語っている。⁽²⁸⁾

(2) 村落における雇傭労働者

村落には、牧畜、耕作、及びそれらに付随する諸労働のために傭われた者が存在した。ある物語は、マガダ国の一村落到に住むバラモンが多数の牧人を傭っていたことを伝えている。⁽²⁹⁾ また雇主に衣食を給された牧人の話もある。

この牧人が仏陀の許で出家することを希望したのに対し、仏陀は牛を雇主に返還し、報告したのち再びやつて来るように命じている。⁽³¹⁾

耕作に従事する雇傭労働者に関する記事はかなり多い。土地所有者はバラモン、大臣⁽³²⁾、豪商⁽³³⁾、長者⁽³⁴⁾ (gahapati) などであり、彼らは小作人に土地を貸出さず、奴隷や雇傭労働者を使つて耕作に当らせていた。耕作に従事する雇傭労働者のほとんどは地域社会内の貧者であり、その中には副業的に富者に傭われた者たちも多かったであろうが、なかには異国の村落で傭われて賃労働をする者もあった。⁽³⁵⁾

土地所有者として特に頻繁に現われるのがバラモンである。仏典には、しばしば王がバラモンに村落を施与 (brahmadeyya, brahmadeya) する記事が見出される。⁽³⁷⁾ 仏典中に記されるバラモン村 (brahmanagāma) の多くはこうして成立したものであろう。⁽³⁸⁾ ここには一人あるいは多数のバラモンが住みつき、村落から徴収される租税の一部あ

るいは全部を享受していた。仏典の中には、バラモンが単なる租税の享受権ばかりでなく、土地の経営権まで与えられたことを想像させる記事もある。面積一〇〇〇カリーサの土地を使用人 (*manussa*) に耕作させるバラモン⁽³⁹⁾、田畑における使用人の作業状況を見廻るバラモン、使用人とともに自ら耕作に励むバラモンなどの例がそれである。バラモン村に限らず、一般の村落にもバラモンは居住していた。彼らのうちには、耕作して生計を立てている者もあつたが、他方では奴隷や雇傭労働者を使つた土地経営を行ふ富者もあつた⁽⁴²⁾。あるバラモンは、他国のバラモンを傭つてこれに奴隷と犂を給し、耕作に従事させている⁽⁴³⁾。次の物語は、こうしたバラモンの土地経営を語るものとして興味深い。

マガダ東北方のバラモン村に、一〇〇〇カリーサの田畑を持つコーシヤゴッタ^{II}バラモンがいた。彼は穀物が実ると丈夫な垣を作らせて、ある者には五〇カリーサ、ある者には六〇カリーサというように、五〇〇カリーサの田畑を自分の下僕たち (*attano purisa*) に授けて番をさせ、残りの五〇〇カリーサだけを給与 (*bhatti*)⁽⁴⁴⁾を出して一人の傭人 (*bhataka*) に授けた。この傭人はそこに小屋を建て、朝に夕に畑の番を怠らなかつた。村人が共同で特殊技能者を傭つたことを伝える物語もある。例えば、ある異国者は村落の入口 (*śamadvāra*) の小屋をあてがわれ、村人から給与 (*bhatti*) を受けて彼らに善悪を教えている⁽⁴⁶⁾。また、同様に村人から賃金 (*paribaya*) を与えられ、村の入口の小屋に住んだ賢者の話もある⁽⁴⁶⁾。

古代インドの村落において、奴隷や雇傭労働者を使用した土地経営がどの程度見られたかを、右の諸資料から論証することは不可能である。しかし、「仏典中に記された」という括弧付きではあるが、ガンジス流域

を中心とする古代インドの村落においては、一般に村落構成員の間に土地所有の差・貧富の差が存在し、貧者の中には富者に隷属して生活を支える者も多かったと言ひ得るようである。また、他村から奴隷や雇傭労働者として流入する者もある程度存在したことが想像できる。

(3) 都市における雇傭労働者

都市では、バラモン、富商、長者、大臣などの家で雇傭労働者が使用されている。自分の家を市の内外に持ち、家族を養うために、あるいは目的物を得るために雇主の家や作業場へ通う労働者もある一方、雇主の家に住込み、奴隷と変らぬ生活を送る者も多かった。彼らの大部分は下層市民の出身者であつたと考えられるが、その他にも零落した豪商 (*setthi*)⁽⁴⁷⁾、零落した長者 (*gahapati*)⁽⁴⁸⁾、貧しいバラモン⁽⁴⁹⁾などの出身者の例が知られている。城門近くの貧民街に住む日傭労働者や家を持たぬ半奴隷的な使用人のなかには、農村地帯からの流入者も多かったであろう。

雇傭労働者の中には、豪商を補佐する大番頭 (*mahakammantika*)⁽⁵⁰⁾ のような実力者もあつた⁽⁵¹⁾。しかし雇傭労働者や彼らの家を語る際に、しばしば、窮乏した (*dalidda, duggata*)⁽⁵²⁾、孤独な (*atāṇa*)⁽⁵³⁾、哀れな (*kappaṇa*)⁽⁵⁴⁾、他人の仕事に縛られた (*parakammāyaṇe yutta*)⁽⁵⁵⁾ などの形容語が付されていることから、彼らが一般に苦しい生活を強いられていたことは容易に想像できる⁽⁵⁶⁾。雇傭労働者のうち、最もみじめな生活を送っていたものに日傭労働者があ⁽⁵⁷⁾る。本生経類のなかには、水運びの賃仕事をして細々と生計を立てている男女や、薄給を受けて道路修理や富者の汚物処理⁽⁵⁸⁾をする者の話がある。生活面から考えれば、奴隷よりもはるかに不安定な生活を強いられた雇傭労働者も

多かつたわけである。日傭労働者の集まる場所あるいは居住区が市内にあり、彼らはここで雇主の現われるのを待った。雇主はこの集合場所にやつて来て労働者を選択し、雇傭契約を結んで連れ去った。次に紹介する『ディヴァーヴァダーナ』の中の物語は、この間の事情を伝えている。

ラージャグリハに住む長者 (gṛhapati) の子が、五百金を仏教教団に布施しようと思ひ立ち、その金額を得るために賃労働をしようと決心した。彼は母の許可を得て雇傭労働者の居住区 (bhṛtāvāṣiṇ) に行き、雇主の現われるのを待った。バラモンや長者がここへやつて来て労働者を傭つて去つて行つたが、彼には誰も声をかけなかつた。空しく帰宅して母にその旨を話すと、母は、お前のような立派な身なりをしていたのでは労働者には見られないから、もつと薄汚れた姿をして行くがよいと忠告した。次の日、母の言葉に従ひ薄汚れた姿で雇傭労働者の居住区へ行き立つていた。その日、ある長者が家を建てるために労働者を傭おうとしてやつて来た。そして、仕事の完成後に賃金を払うという条件で働き手を探した。長者の子は彼に自分を傭つてくれるように頼んだが、柔弱であると断られた。しかし、長者の子は、自分の仕事に満足した場合にのみ賃金をくれればよいと頼み込み、傭われることに成功した。⁽⁶⁰⁾

四、『アルタシャーストラ』の雇傭労働者

すでに述べたように、『アルタシャーストラ』の第二卷第十三章から第十四章にかけて、雇傭労働者 (karmakāra, bhṛtaka) に関する法規がまとめられている。両章で扱われる雇傭労働者の範囲はかなり広く、自分の生産

用具を用いて賃仕事を行なう職人や、俳優、医師までが含まれている。⁽⁶¹⁾ 本節ではまず、ここに見られる諸法規を紹介しようと思う。

(1) 雇傭労働者法規

(契約)

労働者は雇主との間に、仕事の内容、期間、給与などに関する契約を結んだ。契約に際しては、被傭人と雇主との間に「汝は他の者にこの仕事を為さしめてはならぬ。我もまた他人の仕事は為さぬ」といった誓約を交すことも行われた(III, 45)。給与額の決定には、同種の職業についている人々の例や、専門家の見解などを参照すべきことが奨められている(III, 30)⁽⁶²⁾。前もって給与額が定められなかった場合には、仕事量と時間に応じた給与を受けるべきであるとされているが(III, 27)、その場合、特に耕作労働者、牧人、商業使用人の取り分として、それぞれ收穫した穀物、乳酪、自己の商った商品の十分の一が定められている(III, 28)。契約の仕事を完成した被傭人が、現雇主以外の者と新たに雇傭関係を結んで給与を受け、現雇主のものでそれ以上仕事を続けることを欲しないならば、その意思を通すことができた(III, 43)⁽⁶³⁾。すなわち、契約した仕事が完成したときに、雇傭関係は一応解消するのである。

(契約の不履行)

給与に関する争議が起つたときには、証人の証言に基づいて判決が下された(III, 33)。証人のいない場合には、

その仕事が為された場所で詮議が行われた (Miles³²)。給与を受取つたにもかかわらず仕事をしない被傭人は、十二パナの罰金刑に処せられると同時に、その仕事を完成するまで拘束された (Miles³³)。誓約を交したにもかかわらず、雇主が被傭人に仕事をさせなかつたり、被傭人が仕事をしなかつた場合には、違約者側に十二パナの罰金が科せられた (Miles³⁴)。またこの他に、給与を支払わない雇主は給与の十分の一あるいは十分の一が六パナ以下の時には (六パナの罰金刑に処せられ、さらに拒否した場合には給与の五分一あるいは五分の一が十二パナ以下の時には) 十二パナの罰金刑に処せられる、という法規もある (Miles³⁵)。⁽⁶⁴⁾

下賤な仕事に従事中であつたり、病氣にかかつたり、不幸に陥つたりして契約した仕事ができなかつた場合には、被傭人は契約を取消すか、あるいは他人にその仕事をさせるべきであつた (Miles³⁶)。雇主が被傭人に契約した仕事のごく一部分をさせただけで、それ以上させないならば、その仕事は完成したものとみなされ、雇主は契約通りの給与を払わねばならなかつた (Miles³⁷)。一方、被傭人が時間と場所を違えたり、仕事を指示された通りに仕上げなかつた場合には、雇主の意志次第で、その仕事を未完とみなし給与を払わないこともできた (Miles³⁸)。しかし、契約以上の仕事をした者には、努力に対して相応の配慮を為すべきことが奨められている (Miles³⁹)。

(被傭人組合)

被傭人が組合 (sangha) を組織することがあつたらしい。被傭人組合に関して特に定められた法規としては次のようなものがある。

組合被傭人 (sanghabhita) には、契約期限以後に七日の猶予が与えられた。それを過ぎれば、雇主は他人を使

つてその仕事を完成させることができた (Mhats-14)⁽⁹⁸⁾。雇主に告げることなく組合が勝手に組合被傭人を解雇したり加えたりすることは禁じられ (Mhats-15)、『この規定に違反した組合には二十四パナの罰金が科せられた (Mhats-6)』。また組合によつて解雇された労働者には、十二パナの罰金が科せられた (Mhats-7)⁽⁹⁹⁾。組合員の労働によつて得られた報酬は、彼らの間で協定通りに、あるいは平等に分配された (Mhats-8)。彼らは組合を通じて仕事と給与を得ていたのである。

(2) bhṛtya

『アルタシャーストラ』の雇傭労働者法規に見られる契約関係は対等に近い。すなわち、雇傭労働者には契約内容を完遂することのみが命ぜられ、雇主との間に身分的隷属関係は強制されていないのである。しかし、雇主に對して隷属関係にある被傭人の存在を『アルタシャーストラ』が否定しているわけではない。このような被傭人を指すと思われる語に「bhṛtya」がある。この語は bhṛtaka と同じく/bhr-を語源とし、「養われるべき者、隷属者、召使い」などの意味に用いられる。「bhṛtya」の語は『アルタシャーストラ』中に数回出てくるが、(1)bhṛtya と主人 (svāmin) の関係が子と父、弟子と師の間の従属関係と並記されること (Jag-1, Jag-23)、『(2)bhṛtya に対する配慮が主人に奨められていること (Jag-1, Jag-23)』(3)官吏を主人にもつ bhṛtya は主人の過失に対し主人の妻子兄弟などと共に連帯責任をもつこと (Ug-6) などから推して、主人に對する従属性の強い奉公人などがこの語で呼ばれたものと考えてよからう。彼らに對しては、家父長制的な従属関係が求められているのである。

(3) 村落の雇傭労働者

以上に紹介した諸法規は、都市・村落何れの雇傭労働者に対しても適用されるものであるが、特に村落の雇傭労働者を対象とした記事としては次のようなものがある。

徴税官 (gopa) の台帳には、村内の奴隸と雇傭労働者 (karmakara) の数が、耕作者、牧人、商人、職人などの住民と並べて記されていた (IIIsc4)。ここから、村落にかなりの数の雇傭労働者が住んでいたことを推測できる。村落の住人が共同治水作業に自己の代理として雇傭労働者を出すこともあった (IIIsc2)。また他所からやつて来た耕作者が、村落共同体と契約を結び農業に従事することも見られた。こうした耕作者は、契約した仕事をしなかった場合には契約した報酬額の二倍を、また割当てられた醸金や祭礼時における飲食物の寄付をしなかった場合には割当額の二倍を、何れも村落共同体に対して払わなければならなかった (IIIsc3-36)。

なお、『アルタシャーストラ』の中に「村落の被傭人 (grāmahritaka)」に関する記述を散見できるが、彼らの性格については不明な点が多い。「村落の被傭人」の記事は次の個所に見出される。

- (1) 王領地の耕作に「村落の被傭人」あるいは商人 (vaidehaka) を当ててもらう (IIIru)。
- (2) 親族、利害関係者、王、学識あるバラモン、ライ病患者、カースト追放者、賤民 (チャンダーラ)、賤業従事者、不具者、女子、王の官吏、その他、と並べられ「証人たり得ない者」のリストに掲げられている (IIIru28-29)。
- (3) 収穫物の堆積からの残余部分が、乞食人 (bhiksuka) と「村落の被傭人」に与える分として取っておかれる (Varu)。

(4) 官吏の給与表中に「村落の被傭人」の給与が五百バナと定められている (Vaccz)。

「村落の被傭人」を、註釈家たちは床屋、洗濯屋、陶工、鍛冶屋などを指すと考えている。⁽⁶⁸⁾ おそらくこの意味であると思われるが確証は得られない。また、(4)を論拠として、「村落の被傭人」が村吏を意味すると主張する学者もある。⁽⁶⁹⁾ しかし、(4)は文脈から「村落の被傭人」に扮した密偵の意味にもとれるのであり、必ずしも村吏とせねばならぬことはない。

(4) 官営事業の雇傭労働者

『アルタジャーストラ』には、官営の諸事業に傭われた労働者に関する記事がかなり多い。同書第二巻に列举された官営事業は、鉱山、製塩、金属加工、食品加工、交易、林産、武器製造、紡織、農牧、醸造、屠殺、売春などきわめて多方面に及んでいる。各事業はそれを専門に受持つ長官の管轄下に置かれており、また各事業の経営内容は、記録会計局の帳簿に詳しく記されていた (Iltis)。同書第二巻の各章には、官営事業の一々について、原料の種類、加工の方法、製品のリスト等々に関して詳細な記述があり、D・D・コーサンビーの言葉を借りれば「政治論書というよりはむしろ工場生産の便覧のような印象を与える」⁽⁷⁰⁾のである。しかし、官営の諸事業における労働者の構成や雇傭条件などについては、はつきりしない点も多い。以下に官営事業に傭われた労働者の例をいくつか紹介してみたい。

官営事業の労働者、特に技術労働者は、仕事の量や内容、期間、給与などに関して、所轄官庁の責任者と契約を

結んで備われたようである。⁽⁷¹⁾技術労働者の一例として金銀細工の職人を挙げれば、彼らは作業場で金師(sauvartsi-
n)の監督下に置かれ、市民や地方民の金銀に定められた期間内に指定された細工を加えるよう命ぜられた。期限
の指示のない時は、細工を指示通りに仕上げることに責任を負った。そして、仕上りが指示されたものと違った場
合には、給与を失いその二倍の罰金を科せられ、また期限内に完成しなかった場合には、給与の四分の一を失いそ
の二倍の罰金刑に処せられた(IIac-9)。⁽⁷²⁾

紡績には女性労働者が用いられた。女性労働者としては、寡婦、不具女、処女、出家女、罰金を支払う代りに勞
働する女、娼婦の母、老齡の王付女奴隸、神への奉仕をやめた神殿付女奴隸などが挙げられている(IIacc3)。紡績
従業者には製品の質と量に見合った給与が支払われ、また胡麻油や化粧塗料などの特別賞与や、祭日労働に対する
特別手当も用意されていた。しかし、紡いだ糸の量が基準より少なかった場合には、材料の価値に準じて給与を減
らされた(IIacc3-6)。

自分の生計費を得たいが戸外で働くことのできない婦人(夫を外地に送った女⁽⁷⁴⁾、不具女、処女など)の許には、
官婢を送って彼女らに糸を紡ぐ仕事を与えた。彼女らのうち、早朝に紡いだ糸を持つて紡績作業場へ出向く者には、
糸を検査した上で製品と給与との交換が行われた。その際、官吏は彼女らの顔を注視したり彼女らと無駄話をする
と第一罰金(四八一九六バナ)に処せられ、また給与を遅配したり未完の仕事に給与を払つたりした場合には中位
罰金(二二〇一五〇バナ)に処せられた(IIaccu-4)。他方、給与を受けながら仕事をしない婦人や、何物かを
私用、盗取、破壊した婦人は、罰として親指と人差指とを切られた(IIaccu)。

王領地では、王領地長官の下に奴隸 (dāsa) 、労働者 (karmakara) 、罰金を支払う代りに労働する者 (danda-praikartt) などが耕作労働を行っていた (Ilac2) 。彼らの仕事に損減があつた場合には、その損減量に等しい罰金⁽⁷⁵⁾が科せられた (Ilac4) 。『アルタシャーストラ』はまた、王領地長官の直接経営下に入らない王有地を、半作者 (ardhastika) と「自分の肉体労働で生活する者 (svaviryopajivin)」に耕作させてもよいと定めている。両者のうち、前者が收穫の半分を得るのに対し、後者は四分の一あるいは五分の一を得るにすぎない (Ilac16) 。前者は自己の生産手段を用いて耕作する者、後者は耕具や種子を国家に依存する者と考へてよからう。

牧牛長官の下で働らく牧人たちは、現金の給与を受けるか、あるいは毎年一定額の現金や乳酪・皮革を納める条件で畜牛を借りた (Ilac2-5) 。彼らの怠慢に由来する家畜の損失は彼ら自身が弁償せねばならず、また自らあるいは他人に命じて牛を殺したり奪つたりした場合には死刑に処せられた (Ilac4, 6) 。家畜が盗賊や野獣に奪われるか、病死や老死した場合には、直ちに報告する義務があつた。この義務を怠つた場合には、牧人が自ら家畜の代金を弁償せねばならなかつた (Ilac24) 。

官営事業に備われた者たちは、食料や金銭の報酬を受けたが、その額は能力や仕事の種類によつて異つていた (Ilac28, Vac3) 。『アルタシャーストラ』第五卷第三章に官公吏の給与表が載せられているが、ここにおける最高額は時祭官、教師、大臣、宮廷僧官、軍師、皇太子、王母、王妃の年額四八、〇〇〇パナ (Vac3) 、最低は諸雑務や下級の肉体労働に従事する者たちの年額六〇パナ⁽⁷⁶⁾であつた (Vac7) 。技術労働者 (karuṣipin) の場合は下級労働者の二倍の一二〇パナを受けることになっている (Vac6) 。これとは別の章に、王領地長官の下で働らく菜園・庭

園の番人、牧人、奴隸、労働者 (karmakara) は、扶養家族の数に準じて食物を与えられ、更に月一・二五パナの賃金を受けるといふ規定がある (Huzar)。彼らの年額一五パナは、前記の最低所得者の年額六〇パナから食料分を減じたものと考えられること⁽⁷⁷⁾でしよう。

以上のように、官営諸事業で働く雇傭労働者は、各事業の長官の下に厳しく監視され、怠慢や過失に対しては弁償、給与不払い、給与からの天引きなどの罰が科せられた。時には体刑に処せられることもあつた。作業場で、雇傭労働者は奴隸や受刑労働者などと共に働いたのであるが、彼ら相互の間にどの程度労働条件の差別が設けられていたかは明らかでない。また官営事業の雇傭労働者の行動の自由がいかに制限されていたか、彼らと民間の雇傭労働者との間にいかなる区別が存在したか、などの問題についても不明な点が多い。特殊技能職がすでに世襲的専門職となつていたことは想像できるが、⁽⁷⁸⁾低級の労働は下層の民衆（時には上位身分の困窮者）に広く開かれていたものと思われる。

五、ヒンドゥー法典の雇傭労働者

(1) 契約

雇傭労働者は、まず雇主との間に仕事の内容、期間、給与額などに関する契約を結んだ。『ブリハस्पティ法典』は、「一日、一箇月、半月、六箇月、三箇月、一年の契約をもつて傭われた者は、契約した仕事を為さねばならぬ（それによつて）約束した（報酬）を得る」(XVI)と定めている。雇主には、契約で定められた時期（仕事の始

め、中間あるいは終了後）に給与を支払うべきことが命ぜられている（*Nar.* VI₂）。給与の額は労働の種類や労働者の能力によつて差があつたが（*Nar.* V_{4, 22}）、さらに勤勉さや扶養者数などが考慮されることもあつた（*Manu* XI₂₄）⁽²⁾。給与額が前もつて定められていなかった場合について、諸法典は、商業使用人、牧人、耕作労働者は、それぞれ商売から生じた利益の、牛乳の、穀物の十分の一を取るべきであると定めてゐる（*Yaj.* II₁₉₄, *Nar.* VI₃, *Katy.* 656）⁽³⁾。農村における雇傭労働者には、耕作労働者と牧人とがあり、彼らは主として現物給、すなわち穀物や牛乳を受けていた（*Bṛh.* XV₁₄）。彼らの報酬が前もつて定められていなかった場合には、右に紹介したように「十分の一」が彼らの取り分とされたが、その他にも彼らの報酬に関する次のような法規が存在している。

『ブリハस्पティ法典』は、備われて耕作に従事する者（*śrāvahaka*）については、その取り分を「衣食を給される者（*bhaktācchādabhṛta*）は收穫量の五分の一、収入（のみ）を目的に働く者（*bhṛta*）は收穫量の三分の一」と定め（XVI_{1, 2}）、また乳牛の世話をするために備われた者（*dhenubhṛta*）の取り分を「八日につき一日の割合でその日搾つた全部の乳」と定めている（XVI₁₂）。牧人に関しては『ナラダ法典』が一層詳しく、「百頭の牛を（世話した牧人には）報酬として毎年一頭の若い牝牛を与えるべきである。二百頭の（世話をした者には毎年）乳牛一頭を（与えるべきであり）、また（牧人は）八日のうち一日は（全ての牝牛から）搾乳することが許される」（VI₁₀）と定めてゐる。

『ブリハस्पティ法典』や『ナラダ法典』のこれらの法規と、「十分の一」の取り分を定めた前記の諸法典との間にかんがりの差が認められる。特に收穫の五分の一あるいは三分の一を受ける耕作者の場合にこのことが言える。

こうした差を生産関係の変化として把える史家もあるが、⁽⁸¹⁾「十分の一」の取り分を定めた法規は、「給与額が前もつて定められていなかった場合」という条件付きであることに注意すべきである。こうした条件下に「十分の一の取り分」を定めた法規は、後世のヒンドゥー法典にも依然として存在している (*Nar. VI, Katy. 656*)。『ブリハスパティ法典』の法規はある特定の地方の慣習を反映したものと考えてよからうが、ここから直ちに、同法典の時代の前後にインドの広い範囲で耕作労働者の地位の昇が見られたことを結論することはできないであらう。なお、種子、耕牛、耕具などを自弁し、収穫の半分を地主に支払う分益小作人 (*ardhika*) の存在は古くから知られている (*Manu IV²⁵³, Yaj. I¹⁶⁸, Vis. LVII¹⁶*)。『ブリハスパティ法典』で「十分の一」の取り分を受ける耕作労働者は、おそらく分益小作人と同程度の生活を営んだものと思われる。⁽⁸²⁾

(2) 契約の不履行

雇傭労働者 (*bhrtaka*) には、雇主 (*svamin*) に対して従順であることが要求された。雇主を僅かに欺いただけでも給与を失い、法廷に訴えられたのである (*Bṛh. XVI³*)。

雇傭契約を結んでおきながらこれに違反したときには、訴訟が起された。ヒンドゥー法典中には契約の不履行に関するいくつかの法規が存在している。『マヌ法典』中の例を挙げてみよう。

「被傭人 (*bhṛta*) が、病気ではなく傲慢のために契約した仕事を為さないときは、八クリシュナラの罰金を科すべきであり、また彼に給与を払つてはならない。」 (*VIII²¹⁵*)

「病氣であると健康であるとを問わず、契約通り仕事を（為さず、また他をして）為さしめない時は、その仕事
がわずかに未完成であつても、彼に給与を払つてはならない。」（VIII₂₁₇）

同様に、『プリハスパティ法典』（XVI_{1, 7a}）や『カーティヤーヤナ法典』（657）は、労働者が怠慢である場合
には強制によつて仕事をさせるべきであること、それでも契約の仕事をしていないときには、給与不払いや罰金刑に処
すべきことを定めている。給与の前払いを受けたのち、契約の仕事をしてし得るにもかかわらず為そうとしない被傭
人は、給与額の二倍を罰金として王に払い、雇主に給与を返さねばならなかつた（Brh. XVI₁₆⁽⁸³⁾）。

『ナラダ法典』は、契約不履行問題の解決策として給与の前払いを提唱する。「契約した仕事を為さない者には、
まず給与を支払つてその仕事を為すよう強制すべきである。給与を得たのちにもなおそれを為さない時には、
彼は給与額の二倍を払い戻さねばならない」（VI₁₆）という法規がそれである。また、期間契約の労働者で、定めら
れた期限以前に仕事を放棄した者は、雇主に約束の給与と同額を支払い、王に百パナの罰金を支払わねばならな
かつた（V₁₅₃₋₁₅₄）。

『ヤーージュニャヴァルキヤ法典』は、「時間や場所を誤つた者、所得を無効にした者があつたならば、給料を与
える与えないの決定（あるいはどの程度与えるかの決定）は主人の意志次第である」と述べ（II₁₉₅）⁽⁸⁴⁾、さらに二人あ
るいはそれ以上の労働者が一つの仕事に従事している場合には、もし病氣などの障害で仕事が予定通り完成されな
かつたならば、個々の労働者に各々のすでに為した仕事量に応じて（仲裁者の定めた）給与を支払うべきこと、彼
らが契約通りの仕事を完成したならば契約通りの給与を全員に支払うべきこと、を命じている（II₁₉₆）⁽⁸⁴⁾。

前六一四世紀に成立した『アーバスタンアルムスタンパ法経』においても、耕作や牧牛のために備われた使用人に関する法規は存在する。それによれば、仕事を途中で放棄した耕作労働者や傭牧人は鞭刑を受け、その上、牧人は家畜を取り上げられることになっている(II.1, 282-4)。

商人などによつて運搬のために備われた労働者(yahaka)は、貨物が王災、天災以外の原因による損傷を受けた場合にはこれを弁償せねばならず、また彼らのうち出発を妨害した者は、給与額の二倍を払わされた(Yaj. II.197, Nar. VI.8-9, Katy. 658-659)。また運搬人が出発に際し、あるいは路上で、あるいは中間地点で約束を破つたときは、それぞれ給与額の七分の一、四分の一、全額を雇主に払わねばならなかつた(Yaj. II.198⁽⁹⁸⁾)。

以上に見てきたのは、主として被傭人側の契約不履行を対象とした法規であるが、雇主側の不履行を罰する法規も存在する。例えば、約束の給与を払わない雇主に対して給与と利息を支払うべきことが命ぜられ(Nar. IV.6⁽⁹⁹⁾)。また前記の運搬人に関して言えば、雇主側が破約した場合には雇主は運搬人の場合と同じ罰に処せられている(Yaj. II.198)。『ヴィシヌ法典』には、雇主が契約期限の来ないうちに被傭人を解雇するならば、被傭人に過失のあつた場合を除き、雇主は被傭人に予定の給与額を支払い、その上、王に百バナの罰金を払わなければならないという法規がある(V.157-159)。これは被傭人側の同種の違約に対して科せられた罰の重さと一致する。

(3) 責任と過失

雇傭労働者には、雇主から貸与された道具などを注意して扱うべきことが命ぜられてゐる(Yaj. II.193, Brh. XVI.6,

Nār. VI₄)。不注意から生じた損害については、それが不慮の出来事であつた場合を除いて、雇傭労働者側に弁償の義務があつた (Viś. V 155-156)。

農村の雇傭労働者の責任と過失に関する法規としては、特に牧人関係のものが多いに注目させられる。備牧人は、通常、所有主から朝引取つた家畜を日中放牧して、夕方返還したらしいが (Yāj. II₁₆₄, Nār. VI₁₁)、家畜を手許に置いている限り、夜間といえども家畜の安全に対する責任を負つた (Manu VIII₂₃₀)。牧人の過失の例として、まず家畜が他人の田畑を荒した場合が考えられる⁽⁸⁷⁾。この場合、牧人は畑の所有者に損害額を支払うか (Manu VIII₂₄₁, Nār. XI₂₈, Viś. V 146) あるいは罰金刑 (Manu VIII₂₄₀₋₂₄₁, Viś. V 140-145) や体刑 (Yāj. II₁₆₁, Nār. XI₂₈) に処せられた⁽⁸⁸⁾。

ヒンドゥー法典には、牧人の職務の具体的な例として、爬虫類、盗賊、猛獣、洞穴、穴などの危険から家畜を保護すること、家畜が逃亡せぬよう見守ること、力の及ぶ限り家畜を守り叫び声をあげて助力を求めること、家畜の危険や死亡した家畜の数を所有主に知らせること、などが列挙されている。彼らがこうした職務を怠つたときには、所有主に対して家畜に被つた損害を弁償せねばならなかつた (Manu VIII_{232, 235}, Yāj. II₁₆₄₋₁₆₅, Nār. VI₁₂₋₁₅, Brh. X VI_{12, 15-16}, Viś. V 137-138, Āp. II_{1, 28(6)})⁽⁸⁹⁾。一方、家畜が自然死した場合には、証拠を持つて所有主に報告すれば罪にはならぬ (Manu VIII_{234, 236}, Nār. VI₁₇)、また絶叫したにもかかわらず家畜を盗賊に奪われた場合には、直ちに所有主に報告するならば損害の弁償を免れることができた (Manu VIII₂₃₃, Nār. VI₁₆)。

(4) 労働者保護の法規

ヒンドゥー法典類は、雇傭労働者の契約違反や過失に対して厳しい罰を科しているが、他方、彼らを不慮の出来事や雇主側の不当行為から保護するための法規も存在する。そのうち、雇主側の破約行為に対する罰が被傭人の破約行為に対する罰とほぼ同等であること、不慮の災難から被傭人を保護する法規が存在すること、などについてはすでに見てきた。これ以外にも、『マヌ法典』は病気の労働者に期間の猶予を与えるべきことを定め (VII₂₁₆)、『プリハスパティ法典』は被傭人が雇主のために盗みなどの不正行為をなした場合、その罪は雇主側にあると述べている (XVI₁₉)。また、『カーティヤーヤナ法典』は、旅の途中で疲れたり病気になった従者 (salāya) を道中に置き去ろうとする主人に対し、三日間は使用人の面倒を見るために近隣の村に留るべきであると命じており (660)、もし商品が役人に差押えられたり盗賊に奪い去られたりした場合には、雇主は使用人にその時までに通過した距離に相当する給与を支払うべきであると定めている (881)。なお『ヤージュニャヴァルキヤ法典』は、契約以上の仕事を為した者にはより多くの報酬を与えるように奨めている (II₁₉₅)。

このように、ヒンドゥー法典には、雇主側の恣意から雇傭労働者を保護する法規が一応存在しているのである。しかし、現実には雇傭労働者が雇主と対等な立場にあつたかどうかはこれと別問題である。社会的に低い地位にあり、しかも経済的な従属関係に入つた雇傭労働者は、⁽⁹⁰⁾当然生活のあらゆる面で雇主の一方的な支配下に置かれたことが想像できる。

六、総括

以上で、仏典、『アルタシャーストラ』、ヒンドゥー法典という三資料に見出される雇傭労働者の記事の紹介を一通り終った。本節では、以上の各節において得られた知識をもとに、古代インドの雇傭労働者に関する総括的な説明を試みたい。

一口に雇傭労働者といっても、それが来源及び存在形態を異にする雑多な労働者の集合名詞であることはすでに述べた。雇傭労働の種類としては、都市の場合には官営の諸事業や宮廷の雑務、市民経営の諸事業や家内の雑役など、農村の場合には、耕作、牧畜、雑役などが代表的なものである。女子は、清掃、炊事など家内の雑役や紡績などの作業場において使用されている。報酬の形態は、都市の労働者の場合は現金あるいは衣類・食料であり、村落の労働者の場合は通常穀物や牛乳などの現物であつた。

都市の雇傭労働者について言えば、生産手段から全く切離された無産の雇傭労働者が存在したことは確かである。しかし、出身地の村落共同体との関係を密接に保持している者、すなわち出稼ぎ的な性格をもつた労働者も多かったことが推測できる。また、農村における雇傭労働者のかなりの部分は、村落共同体内で自己の生産手段を持ち、季節的にあるいは臨時的に富者に傭われた貧者であつたと考えられる。ここで問題になるのは、地縁的な村落共同体あるいは血縁的・職業的なカースト集団と、雇傭労働者として働く成員との関係である。しかし、血縁的・地縁的な共同体が成員の雇傭労働者化に対していかなる作用を及ぼしたか、都市の雇傭労働者が出身の共同体といかな

る關係を保つていたかなどの問題を、本稿で扱つた三資料から明らかにすることはできなかった。ただし、ガンジス流域を中心とする古代インドの先進地帯の村落には、村落構成員の間に土地所有の大小に準じた貧富の差が存在したこと、富者の中には奴隸あるいは雇傭労働者を用いた農業・牧畜を行う者も多かつたこと、村落から都市へ流入し都市の最下層の住民となつた者の数も無視できぬこと、他村に流れ込み雇傭労働者として働いた者も存在したこと、などの点は認めてよからう。また、村抱えで特殊技能者を傭うことも行われた。彼らは村落全体の意志を代表する機関（村民集会・村老会議・村長）との間に契約を結んで傭われたものと思われる。村落の周辺に住む賤民や部族民が、村落共同体あるいは村内の各家と雇傭關係を結び、低級の労働に従事したことは十分に考えられるが、資料的に裏付けることはできなかった。このうち賤民については稿を改めて論ずるつもりである。

雇傭労働者は雇主との間に何らかの形で雇傭契約を結んでいる。『アルタシャーストラ』やヒンドゥー法典からは、これらの契約關係がかなり発達したものであり、違約に対する制裁は雇主・被傭人の差別なく加えられていることがわかる。また、雇傭労働者に対して法身分的な差別が加えられたことを明示する法規は存在せず、雇主・被傭人間の契約關係は対等であるかの印象を受ける。しかし、本文中でもしばしば述べたように、自由で対等な契約關係を主張できた労働者は都市の特殊技能者などごく限られた人々であつたと考えてよからう。他方、家内の雑役に従事する者たちのなかには、雇主に對して隷屬的な關係、いわゆる家父長制的な支配下に置かれ、世襲的に主家に奉仕する者も多かつたようである。そして、これら両極の間に様々な雇傭關係に置かれた労働者が存在していた。

古代インドの文献において、しばしば主人・被傭人の關係が主人・奴隸間の關係と並記されており、また、仏典

や『アルタシャーストラ』は特殊技能を要する職業以外のかかり多くの職種において、奴隸と雇傭労働者が等しく使用されたことを伝えている。特に家内の雑役など低級な肉体労働の分野では、雇傭労働と奴隸労働は識別困難な形で混在していたと言つてよからう。なお、『アルタシャーストラ』やヒンドゥー法典にみられる労働者保護の法規などを引合いに出して、古代インドの労働条件が他国に比べてよかつたことを主張する史家もある。しかし、これらの資料に示された諸法規は必ずしもそのまま現実に行われていたものではなく、また仏典などの記述によるならば、彼らの生活の不安定さと困難さは、他の古代社会の同種の者たちと異なるものではなかつたことがわかる。

序文において記したように、本稿では雇傭労働者の問題をヴァルナやカーストの問題と一応切離した上で考察してきた。しかし、経済的な収奪が「生れ」の觀念のもとに正当化されたインド社会において、雇傭関係がヴァルナやカーストの問題と無関係であり得なかつたことは言うまでもない。『アルタシャーストラ』もヒンドゥー法典も、バラモンを最上位とするヴァルナ社会の維持という目標に沿つて編まれている。従つて、両資料において、社会構成員の法律上の地位の上下は生得の身分であるヴァルナの上下によつて決定されている。例えば、バラモンはあらゆる面で特権を与えられた存在であるのに対し、シュードラには厳しい身分上の差別が設けられている。ところで、雇傭労働者の大半はヴァイシャとシュードラ、特に後者に属する者たちであつた。時代や地域によつて強弱の差は認められたであろうが、一見純経済的にみえる雇傭関係も、現実には様々な身分的差別関係を内包していたのである。また、すでに本生経類に描かれた社会において、特殊技術を要する職種は世襲的な専門職となりつつあつた。⁽⁹¹⁾この傾向は、後世ますます著しくなつたようである。従つて、こうした職種に関係した雇傭が行われる際に、その

対象となる労働者はきわめて限られていたことになる。これに対し、技術的に単純な肉体労働は貧者一般に開かれていたと言えよう。しかしこの場合にも、宗教的・呪術的なヴァルナ観や淨・不淨観が、自由で純經濟的な雇傭関係に対する抑止作用を及ぼしたことに注意せねばならない。

最後に、本稿で使用した資料の属する時代と地域の社会、すなわちほぼ前五世紀から後五、六世紀に至る時代のガンジス流域を中心とする北インドの社会において、雇傭労働者の占めていた役割に何らかの変化がみられたかどうかという問題が残った。

私は別稿で同じ三資料を使つて奴隸制度について検討したが、三資料の属する時代に奴隸制度に関する際立つた変化を認めることはできなかった。地域や時代の差によつて多少の変化は認められるが、古代インドの奴隸は家内奴隸を主体としたものであり、生産面における奴隸労働の役割は、全時代を通じて副次的な地位を占めるにとどまつたのである。雇傭労働者について言えば、彼らが都市の商工業において多数使用されていたこと、農村においても牧畜や耕作のために傭われた労働者が存在したこと、雇主の家で諸々の雑役に従事する隷属的な被傭人が存在したこと、などは三資料が何れも記すところである。雇傭労働者が生産をはじめとする労働の各分野で重要な諸機能を果していたことは認めてよからう。しかし、本稿で扱つた時代に、彼らが生産活動において果たした役割や雇主・被傭人関係に特記すべき変化が見られたか否かの問題については、解答が得られずに終つた。

三資料の成立順序は、大ざっぱに言つて、仏典↓『アルタシャーストラ』↓ヒンドゥー法典の順となる。そして、

資料に忠実に従うならば、仏典の時代には諸都市で富裕な市民の経営する商業が栄え、都市相互の交易も活発に行われていたのであるが、『アルタシャーストラ』の時代には王都を中心とした官営企業に経済活動の重点が移り、さらにヒンドゥー法典の時代には大規模な民間・官営の企業は後退し、地域社会内の小経営に重点が移るようである。また雇主・被傭人関係についてみれば、仏典には雇主に對する隷屬性の強い雇傭労働者の記事が多く見出され、『アルタシャーストラ』やヒンドゥー法典には對等に近い雇傭関係の例が多い。しかし、これらの傾向は何れも資料の性格の違いに由来するところが大きく、ここから直ちに雇傭労働者の性格の変化や地位の上升・下降を論ずることは控えるべきであろう。そうした結論を下す以前に、雇傭労働の諸形態の各々に関してより多くの資料を用いてより精密な分析をすることが必要であり、また他の社会構成要素との関連を検討することも必要になる。今後こうした問題の検討を進めて行きたいと思つてゐる。

(東洋文庫研究員)

注

- (1) R.S. Sharma, *Light on Early Indian Society and Economy*, Bombay, 1966, pp. 8-11.
- (2) 拙稿「古代インド奴隷制研究の現段階」『史学雑誌』七四ノ六。
- (3) 松井透・山崎利男編『インドの支配体制と土地制度——歴史的考察——(仮題)』所収予定。
- (4) 本稿では次の省略形を用いた。ローマ数字は巻数、アラビア数字はページを示す。
- (5) 本稿では次の校訂・翻訳を参照した。

T. = 大正新修大蔵經

VP. = *Vinaya Pitaka* (PTS ed.)

DN. = *Digha Nikaya* (PTS ed.)

MN. = *Majjhima Nikaya* (PTS ed.)

SN. = *Samyutta Nikaya* (PTS ed.)

AN. = *Anguttara Nikaya* (PTS ed.)

J. = *Jataka* (Fausbøll ed.)

R.P. Kangle, *The Kautilya Arthashastra*, 3 vols., Uni-

versity of Bombay, 1960-1965.

- R. Shamasstry (tr.), *Kautilya's Arthashastra*, Mysore, 8th ed., 1967.

中野義昭訳『カウティールヤ実利論』 昭和十九年、生活社。
なお、巻章句の番号はカングレ校訂本のものである。

- (9) 本稿で主として参照したビンブラー諸法典の校訂・翻訳のリスト及び各法典の省略形を挙げると次のようになる。

1° ヲス法典 (*Manu*)

- J. Jolly(ed.), *Manava Dharmaśāstra*, London, 1887.
G. Bühler (tr.), *The Laws of Manu*, SBE. Vol. XXV, Oxford, 1886.

中野義昭訳『ヲス法典』 昭和二十六年、日本印度学会。
田辺繁子訳『ヲスの法典』 昭和二十八年、岩波文庫。

- G. Jha, *Manu-Smṛiti Notes*, 3 vols., Calcutta, 1924-1929.

11° ヤーシナリヤハトニキヤ法典 (*Yaj*)

- A. F. Stenzler, *Yajñavalkya's Gṛhyasūtra*, Sanskrit und Deutsch, Berlin, 1849.

The Yajñavalkyasmṛiti, Ānandāśrama Skt. Series No. 46, 2 vols., Poona, 1903-1904.

中野義昭訳『ヤーシナリヤハトニキヤ法典』 昭和二十

五年、日本印度学会。
11° ヲス法典 (*Viś*)

- J. Jolly (tr.), *The Institute of Vishnu*, SBE. Vol. VII, Oxford, 1880.

12° ナーリマ法典 (*Nar.*)

- J. Jolly (ed.), *The Institute of Narada*, Calcutta, 1885.

- J. Jolly (tr.), *The Minor Law-Books*, Part I, SBE. Vol. XXXIII, Oxford, 1889.

13° ブリハスパティ法典 (*Brh.*)

- K.V.R. Aiyangar (ed.), *Brhaspati-smṛiti*, Gaekwad's Oriental Series No. 85, Baroda, 1941.

- J. Jolly (tr.), *The Minor Law-Books*, Part I, SBE. Vol. XXXIII, Oxford, 1889.

14° カリーヤヤーキナ法典 (*Katy.*)

- P. V. Kane (ed. and tr.), *Kātyāyanasmṛiti*, Poona, 1933.

- (15) 『ヲス法典』の註に於て述べたマンブースローの譯と、
ついで、本稿では參照するのちのニヤナダ (G. Bühler tr.,
The Sacred Laws of the Āryas, 2 vols., SBE. Vol. II, 1879, Vol. X, 1882)° ヨンムヤー法典類の成立年代に
関するカネーの説は次のようである (P. V. Kane,

History of the Dharmasāstra, Chronological Table of Vol. II-IV°

- 600B.C.—300 B.C. (The Dharmasūtras of Gautama, Āpastamba, Baudhāyana, Vāsiṣṭha)
- 300B.C.—100A.D. (Arthasāstra of Kaṇṇiṭṭha)
- 200B.C.—100/200A.D. Manu-smṛiti
- 100A.D.—300A.D. Yājñavalkya-smṛiti
- 100A.D.—300A.D. Viṣṇu-smṛiti
- 100A.D.—400A.D. Nārada-smṛiti
- 300A.D.—500A.D. Bṛhaspati-smṛiti
- 400A.D.—600A.D. Kātyāyana-smṛiti

(8) 『ポルタシャーストラ』のこの法類は、シロートラの義務として本来ヴァイシヤの義務とされる農牧商などの実業(vartta)を加えている。『アヌ法典』をばらばらにするシロートラ法典類と比べて、このシロートラに対する蔑視があまり認められない。宗教的・儀礼的な立場で書かれたヒンズー法典よりも、シロートラの現実の姿を一層正確に描いていると言えよう。

(9) P. V. Kane, *History of Dharmasāstra*, Vol. II, Part I, pp. 118-133.

(10) 語源は√kr (to do)° Monier-Williams の *Sanskrit-English Dictionary* にて karmakara の意味として

古代インドの雇傭労働者 山崎

「doing work, a workman, a hired labourer, servant of any kind (who is not a slave), mechanic, artisan」などがある。

(11) 語源は√bhr (to bear, to hire)° Monier-Williams にて 「brought, fetched, hired, receiving wages, a hired labourer, servant」 などのある。初期のシャーナ教経典では bhṛtaka などの四種の分類している。divasabhayaga (日給を受ける傭人)° śījātābhayaga (旅行期間中だけ傭人)° śuccatābhayaga (期間中に仕事を仕立てる契約傭人)° śkabhātābhayaga (仕事量に応じて賃金が変わる傭人)° *Tṛṇaṅga*, IV 21 with the commentary of Abhayadevasūri (米西)° R.S. Sharma, *Śūdras in Ancient India*, Delhi, 1958, p. 98 参照。

(12) 「dāso nāma antojāto dhanakṛto karamarāṇito, karmakāra nāma bhṛtako āhatako」 (VP. IV 22a)° など āhataka の意味として 「抑えこむべからざる」 (√dha)° 「鞭を打たれる者」 (√hr)° 「打たれる者」 (√han) などがある。Rhys Davids の *Pali-English Dictionary* にて 「one who is beaten, a slave, a worker (of low grade)」 などの、チャナナを含む「抑えこむべからざる」を意味するものがある。D. R. Chanana, *Slavery in Ancient India*, New Delhi, 1960, pp. 131-

132)° 『フリスチャー・ストーリ』をヘンリ・チャー法典²⁴ ahitaka (概当に入れた者)を奴隷の一種(一時的奴隷)に数え、karmakaraと區別している。ヘーリ律蔵のāhātakaは、何らかの形で債務的隷属關係に置かれた奉公人などを指したものでなからうか。律蔵の英訳者は bhātaka—āhātaka や a hiring— a worker と訳し(1. B. Horner, *The Book of the Discipline*, Vol. III, p. 180)° 和訳者も「傭われたるもの」労働者」と訳している(『南伝蔵』巻二、三六二頁)°

(13) T. XXII 719 (『大正藏』第二十二卷、七一九頁)°

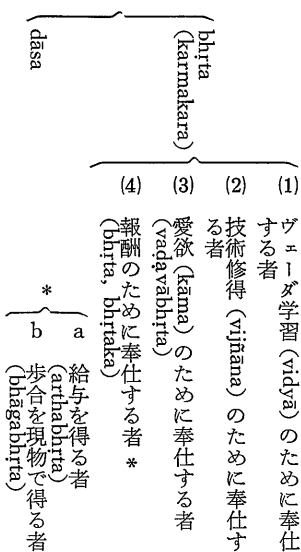
(14) VP. II 134. DN. I 60, III 191. SN. I 76, 92. AN. I 145, II 208. J. I 57, 295, 378, 417, IV 16, 318, V 293, VI 69 etc.

(15) 以下の語は同じで、D.R. Chanana, *op. cit.*, pp. 72-73, 136-138 参照。Mahānidesa (I n) は「porisa」は bhātaka, karmakara, upajivin の三種の purisa」を指すと説明されているが、仏典中これらの語の間に明確な区別が為られてゐることは考えられな。

(16) 「adhikarmakari」は Nar. Va. の關係から家財あつた家事を監視する者と考へられ。Monier-Williams の辞書では「an overseer, superintendent」であり、カーネは「a person who is employed and given authority over all servants and also one who looks to the affairs

(expenditure etc.) of the household」° 説明している (*History of Dharmasāstra*, Vol. III, p. 484)°

(17) 『フリスチャー・法典』(XXV. 4. 16)の分類は「ナーラダ法典」のものやや異つてゐる。



『フリスチャー・法典』の四種の労働奉仕者を総括した意味に用いられた bhīra は『ナーラダ法典』の karmakara に相当する (*Bṛh. XV 16*)° また、右表中の (1) (2) は『ナーラダ法典』の (1) śiṣya と (2) antevasin に相当する。右表中の (3) は他人の女奴隷と交渉をもつたために女奴隷の主人の下で被傭人 (bhīra) 的奉仕を強制される者であり、『ナーラダ法典』ではこの種の労働者を karmakara の範疇に加えず、奴隷の一種とみなしている (*Nar. Va. 36*)° 右表中の (4) は金銭で報酬を受ける労働者と、穀物や牛乳などの現物

で生産額の一定割合を受ける労働者をいう。『ナールダ法典』中の(3)bhṛtaka と(4)adhikarmakṛit という項目に相当すると言えよう。

- (29) D. R. Chanana, 'The Sūtra, the Dāsa and Manu, *Indian Journal of Social Work*, Vol. XX, no. 3 (1959), pp. 201-208.

- (31) 『ペリピンシヤ法典』のあだ bhṛtaka を高級(難士 śyudin) 中級(耕作者 kṛiṣṭala) 下級(運搬人及び家事労働者 bhāravāha, gṛhākarmakṛit) と分けていう(XV-13)°

- (32) 『jātukarmakṛitścoḥko viśeṣo vṛttireva ca (V₂)』
 मन्त्रे 「...their respective position and income depends on their particular caste and occupation」を記す。本頁中の語は Aśahāya の語源とされている(SBE. Vol. XXXIII, p. 131)°

- (31) Brh. XV₁₁ に於て匠業は高級である°

- (32) T. IV₄₆₉.

- (33) *Dṛvyaśvādāna* (Cowell and Neil ed.), p. 304. J. I 32.

- (34) *Dṛvyaśvādāna*, p. 43. J. III 444-445.

- (35) 食料給付の例として「得三箇米」(T. IV₄₆₉) 「得麴二升」(T. IV₄₆₈) などである。衣類を得る例として T. IV₅₄₇. J. V 211-212 などがある°

古代インドの雇傭労働者 山崎

- (26) 註(2)と(25)参照。

- (27) ある雇主は職を求めてやつてきた貧女に「我々は(お前が)三年間仕事をしたところだ。お前の働いた分の有無を返さなければ(働いた報酬を)をらへ」(mī saṃvacharāṇi karme kate tava guṇāguṇaṃ śātra dāssāma) と言う(J. V₂₁₋₂₂)°

- (28) 田守として働かれた男は、稲が鸛鵲に荒らされるのを見て、雇主(ペリピン)が損失した米を計算して自分の負債とすることを恐れている(brahmaṇo sālin ag-ghāpetvā mayham iṇam karissat) (J. IV_{27-27a})°

- (29) DN. III 190-191. 同ページは華荘閣蔵は T. I 72. DN. I 60 に於けるである°

- (30) T. III 864.

- (31) T. II 315, 759. cf. SN. IV 181. その他に雇傭人の記事は多量。例として *Vimānavatthu*, p. 72. J. I 388.

- (32) T. IV 400.

- (33) VP. IV 162. J.VI 69.

- (34) T. IV 387, XXIII 763. *Dṛvyaśvādāna*, p. 87.

- (35) *Dṛvyaśvādāna*, p. 87. J. IV 43.

- (36) T. III 47, 77-78. J. I 239.

- (37) T. I 42, 82, 94, III 92. *Mahāvastu* III 441. *Dṛvyaśvādāna*, p. 74. J. II 166, III 104, 229, IV 99, 473, V 20, VI 462, etc.

(38) 「……Opasādan nāma Kosalānaṃ brāhmaṇagāmo

……Tena kho pana samayena Caṅkī brāhmaṇo Opasā-
dan ajjhāvasati……rāññā Pasenadiṇā Kosalena dinnam
rājadāyaṇ brahmadeyyaṇ」(MN. II 164) T. I 42, 82, 94.
DN. I 127, 224, etc.

(39) J. III 293.

(40) T. III 865.

(41) *Suttanipāṭa* I 12. SN. I 172.

(42) T. II 319. IV 174, 228, 428, 469. VP. IV 47, 266. J. II 165,
III 162, IV 167, V 68. ‘ンリキモン村と明記をなすところだ’
「般社落とことだ’ ンれらの村の中ニンリキモン村が含まれ
て」のふたつは当然考えられる。

(43) T. III 77-78.

(44) J. IV 276-277.

(45) J. I 239.

(46) J. I 296.

(47) J. I 111.

(48) T. IV 354. *Divyāvadāna*, p. 87. J. II 139, III 325.

(49) T. IV 370. J. I 475.

(50) J. III 446.

(51) J. I 227.

(52) J. I 422, II 139, III 325, 406, 444, IV 43, V 211.

(53) *Vinduvavūhu*, p. 69.

(54) *Vinduvavūhu*, p. 69. J. III 446.

(55) *Apadāna* I 76, 270.

(56) 彼らの給与の例として、一パーサカ半の日給(○)を得て母を養つてゐる者(J. III 326)‘半パーサカの日給(○)を得て水運びをする男女(J. III 446)などがあつた。

(57) J. III 446.

(58) J. VI 348.

(59) T. IV 397.

(60) *Divyāvadāna*, pp. 303-305.

(61) M. Scheelich, “‘Karmakara’ im Arthaśāstra des Kautilya, in W. Ruben’s *Die Gesellschaftliche Entwicklung im Alten Indien*, Vol. I, Berlin, 1967, pp. 234-235.

(62) III 12(30) は職人・技術者・俳優・医師・吟遊詩人、召使など、の給与決定の条件を定めた法規。

(63) 「karmasīṅhāpane bharturanyatra gṛhīta vetano nā-sakāmaḥ kuryāt」異訳が多うが、カンマとて訳を採用した。中野訳は「傭主が他の者に仕事を命じてその人が賃金を受取つた時には、彼は希望がなければ仕事をしなかつともよい」とである。

(64) 「apavyayamāne (拵けしつゝなふあそばさ)」の意味は、

雇主が給与の支払いをあくまで拒否した場合か (Kangle)。⁶⁶ 被傭人が給与を受取つた事実を偽つて否認した場合 (Kane, *op. cit.*, Vol. III, p. 478) の何れかである。⁶⁷ 「*dasābandha*」 「*pañcabandha*」 は他説のよからず「十倍」「五倍」ではなく、カンダレ訳の「十分の一」「五分の一」が正しいと思われる。

- (66) 「*śaśaktāḥ kutsite karmāṇi vyādhau vyasane vā nuśayam labheta, pareṇa vā kārayitum* (2)」「*kutsite karmāṇi*」とは「仕事に上癡なものをいふ」(Kangle)。「上癡な仕事に従事中のもの」(Shamasastri)。「仕事の手續が廻らぬ」(中野)なる「*anuśayam labheta*」とは「(奴隷を)収養するもの」(Kangle)。「養分が与えられない」(Kane, Vol. III, p. 478) なる考へる。従つて「*asya vyayakarmāṇā labheta bharta vā kārayitum* (3)」なるのは「ある人は彼(被傭人)の出費 (vyayakarmāṇa) により雇主は(その仕事を)為すもの」の意味か (Kangle)。⁶⁸ 中野訳は「(いれど甚く) 出費 (vyaya) は仕事 (karma) により恢復するもの」である。

- (68) 「*tesāmāhiṇ sapterātramāsita* (13) *tato hyamupapathapayet, karmāṇispākaṇca* (14)」カンダレは「彼の(組合員)のうちから(仕事に)就かされた(労働者)は七夜

の間と定まるべきである。その後(組合は)他の者を送つて仕事の完成を確実なものとすべきである」と訳し、組合員は雇主との間に親密な関係が生ずるのを避けるため、七日交替で仕事をしたと考えよう (op. cit., Vol. II, pp. 276-277)。

- (67) カンダレはこの法規を「組合によつて移動させられた労働者が雇主に告げずに去つた場合の罰を定めたものであり、組合が彼の代りに罰金を払つたと考へよう (op. cit., Vol. II, p. 277)。

- (68) Kangle, *op. cit.*, Vol. II, p. 64, note, p. 352, note.

- (69) *Ibid.*, Vol. II, p. 64, note, Vol. III, pp. 196-197. H. Raychaudhuri, *Political History of Ancient India*, 6th ed., University of Calcutta, 1953, p. 293.

- (70) ローサンジャー著・山崎利男訳『インド古代史』1111頁。

- (71) 職人・技術者 (karuṣiṇin) との契約を「仕事量・時間・給与・仕上げを定めた (kṛtakarmapramāṇakalavetanaphalanispatu)」なる表現で記している (II 180, 213, 287)。

- (72) 全給与の二倍、減給額の二倍、得た給与額(四分の三)の二倍と三通りの場合が考えられるが、カンダレは最後の説をとり (op. cit., Vol. II, p. 133, note)。

- (73) 官営事業の金銀細工師に関する本文中の法規とはほ同じものが、民間の職人一般に対しても定められている (IV 14-7)。
- (74) 「*proṣṭāvidhava*」をカンテンは「*proṣṭā vidhava*」と記し、「*proṣṭā*」を「*pravrajita* (出家女)」の意とし、「家を離れて住む女、寡婦」と訳している (*op. cit.*, Vol. II, p. 169)。
- (75) 四足・二足の世話係 (*catuspadadvipadapariārake*)、従僕 (*patikarmika*)、付人 (*upasthāyika*)、守護者 (*pālaka*)、強制労働者 (*visiti*)、捕縛者 (*bandhaka*) など。なお、カンテンは後述する一節にあるマリーヤの役人 (*āryayukta*)、騎乗者 (*āroṇaka*)、マリーナヴァカ (*mānavaka*)、山掘者 (*saiakhanaka*)、全づの従者 (*sarvopasthāyin*)、および年額六〇パンを受たると主張する (*op. cit.*, Vol. II, p. 351)。
- (76) 「*yathāpuruṣaparivāpan*」の訳には「扶養者の数に準じ」 (*Kangle*)、*「為された仕事の量に準じ」* (*Shamasastri*)、*「(御領地に頂かる) 人々と共にする補助に準じ」* (中野) などがある。
- (77) *Kangle, op. cit.*, Vol. III, p. 209. なお官営事業で働かへ奴隷や労働者には、時として穀物屑や腐敗酒が与えられた (II 156a1, 256a3)。
- 『ペマ法典』には、王の下級傭人の給与を日々最低一パン (及び月毎に穀物、半年毎に衣類)、最高六パンと定めている (VII 12a)。すなわち、年額にして『アルタシャーストラ』の最低給の六倍となる。しかしパンの重量や価値は可変であり、銀貨・銅貨の区別も明らかでないため、両法規の給与額を直ぐに比較することはできない (S. K. Maiti, *The Economic Life of Northern India in Gupta Period*, Calcutta, 1957, p. 149)。
- (78) 特定の職業を結んでいた血縁集団の存在は、専門技術をもつ職人 (*kāru, śilpi*) と *「Tājāta (one born to that kind of work, i.e. expert)」* という形容詞が付されていることからも推測できる (II 113, 123, 183, 253 etc.)。
- (79) *Manu X 124* は「シラモンに仕えるシチードラに関する法規」。
- (80) 『ペマ法典』は、給与を支払ってもらえない傭牧人に關して「給与として賃金の代りに牛乳を得る傭牧人 (*śīra-bhṛtagopa*) は、主人の許しを得て十頭中の一頭から搾乳し得る」と定めている (VIII 2a)。十分の一の取り分を定めた法規は *Arthasāstra III 123a* にも存在する。
- (81) R. S. Sharma, *Śūdras in Ancient India*, Delhi, 1958, pp. 225-227, 238-240. シヤルマは、ビンシュワール法典以外に、「六頭の乳牛の世話をするときには一頭からの搾乳、百頭の乳牛の世話をするときには一對の牛、商業使

用人は利益の七分の一、耕作労働者は収穫の七分の一の取り分を定めた『マハーバーラタ』(Sāhitya-parvan LX)の記事を引用している。なお、シヤルマはヒンドゥー法典類にみられる雇主・被傭人関係が『アルタシャーストラ』のものより改善されていると主張しているが、そのように考えられない点も多い。『アルタシャーストラ』に、収穫の二分の一―五分の一を得る王領地耕作者に関する記事が存在することはすでに述べた(本文五九頁参照)。カンタレは、こうした経営が私有地においても行なわれていたことを推測している(Kangle, *op. cit.*, Vol. III, p. 172)。

(32) S.K. Maity, *op. cit.*, pp. 149-150.

(83) 『ヤーージュニヤヴァルキヤ法典』には、請負った仕事を放棄した雇傭労働者は、もしすでに給与を受取つていたならばその二倍を、未だ受取つていなければ約束した給与と同額を(雇主に)払わねばならぬことが定められている(II. 38)°。

(84) N.R. Acharya (ed.), *Yājñavalkyasmṛiti of Yogiśvara Yājñavalkya, with the Commentary Mitākṣara of Vijnaneshvara*, 5th ed., Bombay, 1949, p. 279. P.V. Kane, *History of Dharmaśāstra*, Vol. III, p. 477.

(85) 『ナーラダ法典』では、運搬契約した物資を放棄した者に対する罰として、給与の六分の一を雇主に支払うべき

ことが定められている(VI. 6)°。

(86) 『プリハスパティ法典』によれば、契約した仕事が完成したにもかかわらず給与を支払わない雇主は、王によつて支払うよう強制され、さらに適当と思われる罰に処せられた(XVI. 1)°。

(87) ただし、田畑が村落や共有地や公道の近くにあるか、田畑に垣があつたか、牛が出産後十日以内であるか、天神に捧げられた家畜か、不則の災難か、などの条件によつて牧夫の罰は軽減されるかあるいは無罪とされた(*Manu* VIII. 238-242, *Yaj.* II. 162-163, *Nar.* XI. 30-33, 36-37, 40, *Vis.* V. 147 etc.)°。

(88) 体刑の場合には雇主が罰金支払いの義務を負つた(*Yaj.* II. 161, *Nar.* XI. 28)°。『ナーラダ法典』には、牧人の怠慢の場合の責任は雇主にはないと定められている(XI. 38)°。

(89) 原価の弁償と同時に王に対する罰金を支払うよう定めた法規もある(*Yaj.* II. 165, *Nar.* VI. 13, *Bṛh.* XVI. 12, 16)°。

(90) 例えば、ンラモンに仕え、主人の家族の残食や古衣、穀物屑や古家具を受けるミナーツラ(*Manu* X. 124-125)などは、隷属的な被傭人に相当するであろう°。

(16) R. Fick, *The Social Organization in North-East India in Buddha's Time*, tr. by S. Maitra, University of Calcutta, 1920, Chaps. X-XII.